

令和3(2021)年度 文部科学省委託事業

日独学生
青年リーダー交流
事業報告書

目次

事業概要	1
------	---

<事業報告>

1. 参加者名簿	4
2. 日程	6
3. ダイジェスト	8
4. 参加者アンケート	12
5. 個人レポート	14

<成果と課題>

1. 日本団成果報告	28
2. 全体の総括	29

事業概要

1. 事業趣旨

ボランティア活動を行っている日本とドイツの学生の交流を推進することで、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

2. 実施関係機関

(1) 主催

日本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

(2) 実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

ドイツ：ベルリン日独センター

3. テーマ

若者の社会参画

4. 参加人数

日本：24名

ドイツ：6名、ディスカッションのみ参加 8名

5. 日程（時間はすべて日本時間）

(1) 日本団プログラム

- ・事前研修（※） 8月28日（土）午後1時30分～午後5時
- ・講義 9月8日（水）午後4時～午後7時
- ・バーチャル訪問① 9月9日（木）午後4時～午後7時
- ・バーチャル訪問② 9月13日（月）午後4時～午後7時
- ・まとめ・ふりかえり（※） 9月14日（火）午後4時～午後7時

※ 「事前研修」は青少年教育振興機構、「まとめ・ふりかえり」はベルリン日独センターがそれぞれ担当。

(2) ドイツ団プログラム

- ・講義 9月1日（水）午後4時～午後7時
- ・バーチャル訪問① 9月2日（木）午後4時～午後7時
- ・バーチャル訪問② 9月3日（金）午後4時～午後7時

(3) 日独合同プログラム

- ・ディスカッション① 9月10日（金）午後4時～午後7時
- ・ディスカッション② 9月11日（土）午後4時～午後7時

※ 新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、全日程を通してWEB会議システムを使用したオンライン形式で実施。

事業報告

1. 参加者名簿

※ 参加者氏名、所属等は省略。

(1) 日本団

(2) ドイツ団

2. 日程

○日本団プログラム

月 日	プログラム
8月28日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研修 ・オリエンテーション ・自己紹介 ・講義Ⅰ：ドイツを知る ドイツ連邦共和国大使館広報文化専門官 ホーボルト・幸夫・アンドレ 氏 ・講義Ⅱ：若者の社会参画 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター研究員 両角達平 氏
9月8日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> ・開会 ・講義Ⅰ：社会法典第8編とドイツの青少年援助 ザクセン州青少年連合 広報・ロビー活動担当 ダニエラ・ザーロ 氏 ・講義Ⅱ：子ども・若者の参画 ザクセン州青少年連合 青少年参画窓口担当職員 スヴェタ・モーザー 氏
9月9日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャル訪問①： 民主主義と勇気ネットワーク(NDC) ライプツィヒ支部 講師：NDCリーダー アルムート さん、ローヴィス さん マライケ — 子どもと家族の居場所 講師：マライケ所長 カタリーナ・ヴェンツェル 氏 取組／事業紹介、質疑応答、意見交換
9月13日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ザクセン州青少年連合 事務局長 ヴェンケ・トゥルンポルト氏との意見交換 ・バーチャル訪問②： [U25] ベルリン (ベルリン大司教管区カリタス連盟 25歳未満オンライン自殺予防相談) 講師：社会教育専門職 タニア・ルッパート 氏 ジェニー・ヴィンクラー 氏 講義、質疑応答、意見交換
9月14日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校におけるボランティア活動紹介 (動画) ・ザクセン州青少年連合、ベルリン日独センタースタッフとの意見交換 ・学習成果共有 ・まとめ

○ドイツ団プログラム

月 日	プログラム
9月 1日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> ・開会 ・講義：若者の社会参画 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター研究員 両角達平 氏
9月 2日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャル訪問①：淡路エリアマネジメント 取組説明、質疑応答、学生ボランティアを交えた意見交換
9月 3日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャル訪問②：特定非営利活動法人キッズドア 取組説明、質疑応答、学生ボランティアを交えた意見交換

※この他ドイツ団は2日間の事前研修及び1日間の事後研修をドイツ側担当機関が実施

○日独合同プログラム

月 日	プログラム
9月10日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・開会 ・自己紹介、全体アイスブレイク ・グループディスカッション① テーマ「私のボランティア活動」 <ul style="list-style-type: none"> 1) 普段の活動内容 2) ボランティア活動のやりがい 3) ボランティア活動における課題
9月11日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループディスカッション② テーマ「私のボランティア活動」 <ul style="list-style-type: none"> 1) コロナ禍におけるボランティア活動 2) ポスト・コロナのボランティア活動の必須条件 ・成果共有、講評 ・閉会

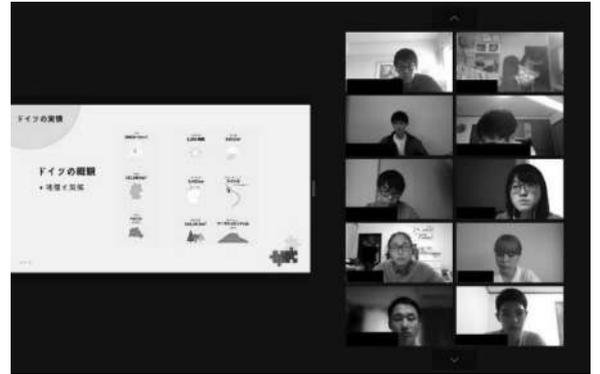
3. ダイジェスト

【日本団プログラム】

<8月28日(土)>

○日本団事前研修

簡単な自己紹介を行った後、ドイツ連邦共和国大使館広報文化専門官のホーボルト・幸夫・アンドレ氏から「ドイツを知る」、青少年教育研究センター研究員の両角達平氏から「日本の若者の社会参画」をテーマにした講義を受け、交流に向けた基礎的な知識を学んだ。また、後半には、関心事項や普段のボランティア活動について互いに理解を深める自由交流の時間を設けた。これにより、参加者の緊張が解け、距離が縮まった。



©ドイツ連邦共和国大使館

<9月8日(水)>

○講義

ザクセン州青少年連合広報・ロビー活動担当ダニエラ・ザーロ氏から「社会法典8編とドイツの青少年援助」について、青少年参画窓口担当リヴァー・リュッキング氏、スヴェタ・モーザー氏から「子ども・若者の参画」について講義を受け、ドイツの青少年援助制度やボランティア活動について学んだ。参加者からは「ドイツではボランティアの無償性は重視されるか」「民間団体が主体となって青少年育成を行うことの公共性と安全性についてどう考えるか」等、日独のボランティア制度の違いや、若者の参画のあり方について幅広い質問があがった。

青少年援助と青少年育成 | ①

青少年援助とは何か

- 青少年援助 = 社会や共同体にとって青少年が有意義で良い成長を遂げることができるための任務と給付すべて
- 青少年援助は子どもと若者の社会化を支援
(社会化: 良い人間関係を築き社会の一員に育っていく、緊張感のある生涯にわたるプロセス、人格形成の過程でもある)
→青少年援助は学校と家庭に次ぐ第3の社会化の場
- 例: 保育所、相談及び保護(緊急一時保護、社会的養護の施設)、余暇活動の機会と場(青少年育成活動)

www.kjrs.de

KINDER & JUGEND SACHSEN

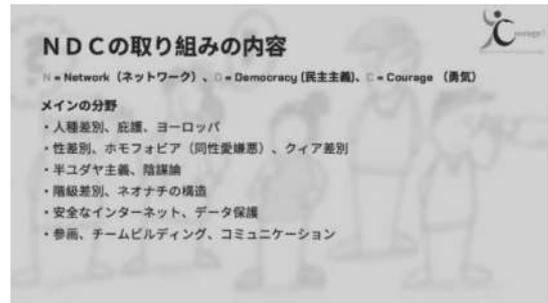
私たちにとって参画とは...

- ...個人と組織を決定過程と意思形成過程に参加させること
- ...子どもと若者の意見を聞き、子どもと若者が関係することすべてについて、当事者の意見を考慮すること

<9月9日(木)>

○バーチャル訪問①

前半は、「民主主義と勇気ネットワーク (NDC) ライプツィヒ支部」の担当者から取組説明を受けた。民主主義、社会参画、差別等に関する取組についてワークショップ形式で学んだ。担当者との意見交換では、ドイツの若者の民主主義や政治への関心の高さ、活動の意欲に関して積極的に意見が交わされた。



後半は、ドレスデン市内でも失業率が高く、多くの社会問題を抱え、子どもに関心がない親が多い地区で、地元の人々に居場所を提供し、子どもが信頼できる大人がいることを伝えながら、社会性を身につける支援をする団体「マライケー子どもと家族の居場所」の取組について学んだ。担当者から、若者の貧困の連鎖を断ち切るための支援や、居場所提供の取組について、動画を用いた説明を受けた。ドイツの若者を取り巻く様々な社会問題について現場の声を聴くことができ、日本団からは具体的な支援の内容や、コロナ禍におけるボランティア活動のあり方など、幅広い質問が聞かれた。

<9月13日(月)>

○バーチャル訪問②

「[U25] ベルリン (ベルリン大司教管区カリタス連盟 25歳未満オンライン自殺予防相談)」担当者から、若者の自殺予防に関する取組の説明を受けた。また、実際に現場でカウンセラーとして活躍するボランティアスタッフとの意見交換を実施した。団体の活動内容だけに留まらず、ボランティア観や時間の使い方、学業と活動の両立等についても意見が交わされた。

青少年の自殺	ピア原則
<ul style="list-style-type: none">■ 2番目に多い死因■ 2019年のドイツに於ける25歳未満の自殺者数は471人■ 自殺未遂者の推定人数はその約20倍■ 1日の自殺未遂者の推定人数は30人	<ul style="list-style-type: none">○ 相談者の年齢は25歳未満○ ピアカウンセラー(16歳～25歳)○ 同世代の相談員が話を聞く○ 同じ目線で話ができる

各セクションの下部には「[U25]」のロゴと「Für sehen und handeln CARITAS」のロゴが並んでいる。

<9月14日(火)>

○まとめ・ふりかえり

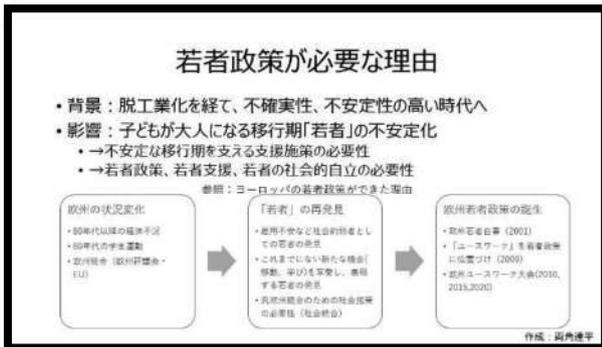
ザクセン州青少年連合担当者との意見交換を実施した後、日本団から研修全体を通じた成果の発表を実施した。「ドイツでは若者の政治への関心が日本と比較して高いことを学んだ」「まわりの意見に影響されることなく、積極的な活動を続けていきたい」「コロナが終息したらバーチャルではなく、実際に各団体を訪問して話したい」等、多くの肯定的な意見が聞かれた。

【ドイツ団プログラム】

<9月1日(水)>

○講義

青少年教育研究センター研究員の両角達平氏から「日本の若者の社会参画」をテーマにした講義を受けた。意見交換では「日本の学生はどれくらいの時間をボランティアに割いているのか。その時間で十分と感じているのか」「ボランティアをしたい若者が、十分に活動できない理由はあるか」等、若者の社会参画への意識が高いにも関わらず、活動の機会が限られるという問題についての質問が多く聞かれた。



作成：両角達平

<9月2日(木)>

○バーチャル訪問①

「淡路エリアマネジメント」担当者から、学生による地域活動を支援する取組について学び、実際に活動する学生ボランティアとの意見交換を行った。「なぜボランティアを始めたのか、続けている理由は何か」「ボランティア活動と学業の両立はどの程度できているか」等、ボランティア活動を続ける為の要因についての意見が多く交わされた。

普段の活動紹介 神田祭



コロナ禍以後の活動

地域情報誌「FAB」編集

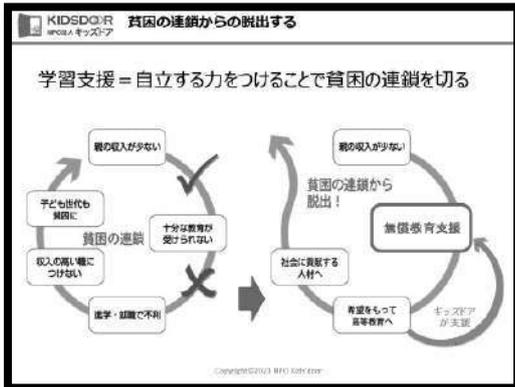


<https://www.waterras.com/fab.html>
https://www.waterras.com/event/wp-content/uploads/2020/12/FREE-AWAJ-BOOK-8890_No.31.pdf

<9月3日(金)>

○バーチャル訪問②

「特定非営利活動法人キッズドア」担当者から、貧困家庭及び被災地での学習支援の取組について学び、現場で支援を行う学生ボランティアとの意見交換を行った。取組紹介では、貧困の連鎖や児童虐待といった日独共通の社会問題への質問が多く、また、意見交換においては、「ボランティアをする上で魅力に感じていることは何か」「ボランティアの経験が仕事や学業に活かしたことはあるか」といった、自身が感じるボランティアの意義や、学業・就職等への優遇措置について話し合われた。



東北で活動を続ける理由

- ・インフラや施設の整備が進む中で
子どもの心の支援が必要になってくる
→子ども支援は長期で寄り添う必要がある
- ・地方と都市の間に教育格差や体験格差が広がる
→塾や習い事の選択肢の幅が大きく変わる

資料：認定 NPO 法人キッズドア提供

【日独合同プログラム】

<9月10日(金)、11日(土)>

○ディスカッション

日独合同の4グループに分かれて2日間にわたってディスカッションを実施した。「ボランティア」をテーマに、普段の活動、ボランティア観とやりがい、各自の活動における課題とこれからの活動等について、活発な議論が行われた。コロナ禍におけるボランティア活動についても言及され、「ポストコロナ社会においても、オンラインによるコミュニケーションを活用し、効率化を進めるべきであると同時に、対面交流の大切さについても改めて議論していくべき」「当たり前のことが当たり前でないことが分かった。人とのつながりを大切に、これからも活動を続けていきたい」等の意見が聞かれた。



4.参加者アンケート

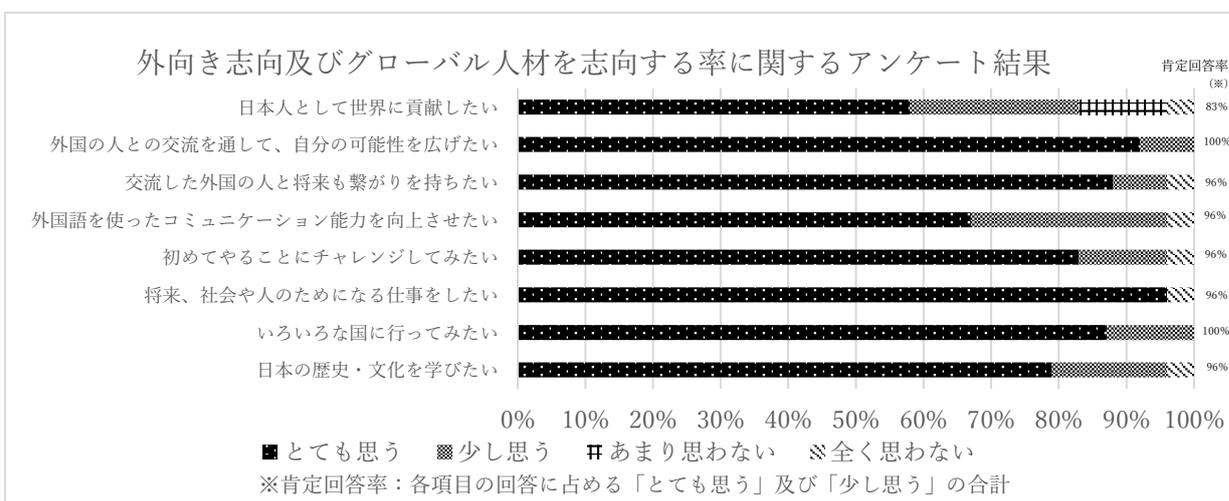
(1) アンケート集計結果

①事業全体の満足度



「事業全体の満足度」に対する回答は「満足」及び「やや満足」を併せた肯定的な回答の率が100%と、参加者にとって有意義な研修になったことが伺える。

②外向き志向率、グローバル人材率



【外向き志向の分析】

外向き志向とは、日本人参加者に対し、文部科学省が定めた調査項目3項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか?」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか?」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか?」のアンケート結果を集計したものである。また、そのうち肯定的な回答の集計から算出した本事業参加者の外向き志向率は98.4%となっており、極めて高い数値を示している。

【グローバル人材志向率の分析】

国立青少年教育振興機構では、上記の外向き志向調査に加え、独自に語学力・コミュニケーション能力及び異文化に対する理解と日本人のアイデンティティー等を加えた8項目のアンケートを作成し、「グローバル人材を志向する率」として、平均80%以上の肯定的回答を得ることを目標に事業を実施している。本事業においては、日本人参加者の事業後のグローバル人材を志向する率が95.3%と高く、目標を達成できたと考える。

(2) 参加者の声

①オンライン交流について

- ・ 今後もオンラインでの交流企画を続けてほしい。
- ・ 対面より、オンラインでのスライドを使った講義の方が分かりやすく感じた。
- ・ オンラインでの実施であったからこそ、参加することができた。
- ・ オンラインだからこそ、いろんなところに住んでいる人と出会えた。
- ・ WEB 会議システムに関するサポートや通訳など、快適に交流できる体制が整っていた。
- ・ オンラインでの交流は魅力的だったが、やはり現地に行って直接経験し、話を聞きたいと感じた。

②プログラムについて

- ・ 語学学習の意欲向上につながった。
- ・ 現地の担当者から意義深い内容の話を聞くことができた。
- ・ ドイツの方々との交流を通してもっとドイツについて知りたい、来年もこの研修に応募して現地を訪問したいと思った。
- ・ もともとヨーロッパが好きで、異文化にも興味はあったが、他の参加者の政治やボランティアに対する話を聞き、まだ知らないことがたくさんあることを実感した。
- ・ 社会参画やボランティアについて、ここまで深く、多くの人と対話できたのは初めてだった。毎日が発見の連続だった。
- ・ 講義だけでなく、ディスカッションも行うことで考えを深めることができた。
- ・ ディスカッションでは、ドイツ団だけでなく自分と違う組織で活動している日本人の考え方に触れることができて良かった。
- ・ 参加者全員が積極的に発言し、オンラインであるにもかかわらず実りある刺激的なプログラムだった。
- ・ もう少し日本団員同士でフリーに話せる時間があればよかった。

③今後の取組について

- ・ 日本団、ドイツ団の参加者のレベルの高さにとても刺激を受けた。もっと多くの経験と勉強をしたいと思った。
- ・ ドイツに留学をしたいと考えている。この出会いを大切に、ドイツ団員やドイツ側担当者に会える日が来るのを楽しみに思う。
- ・ これからもドイツ語の勉強やボランティアなどの社会貢献活動を頑張っていきたい。

5. 個人レポート

※ 氏名、所属等は省略。

(1)

■このプログラムを通して学習したこと

若者の社会参画といっても様々な種類があり、ただ形だけの参画や、承認するだけの参画、意思決定の場に同席し決定に参加する場合などがあり、いわゆるロジャーハートの参画の梯子は下の段から上の段にかけて社会参画の段階が高くなっていると学んだ。ドイツでは若者の社会参画自体が、学校、州議会、家庭、活動団体内で頻繁に行われている傾向にあるだけでなく、見せかけの参画自体が少なく参画の梯子の一番上位に位置するような社会参画が多くみられる。州議会などで何か若者に関する法律を作る際には若者に諮問を求めるなど立法の分野まで若者の社会参画が及んでいることに感動した。それに対して日本では参画の機会自体が少ないように感じた。

また、日本では意思決定の際にじゃんけんをする空気を読むということが多いのに対し、ドイツでは民主主義的な多数決を意思決定として重要視しており、話し合いもその意思決定プロセスの上で必要なものであると学んだ。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

今回の事業では参加者の団体の活動内容を知るだけでなくドイツ、日本での青少年の社会参画についてボランティア活動を中心に学ぶことができた。特にドイツでは意思決定の際話し合いを重視しているため自分の所属団体でも日本人気質の「流れ」で決めるとのではなく、どのような理由で判断したかなど、民主主義的な土壌を築くという目的も兼ね、役職関係なく多数決で物事を決める機会を増やしていきたい。

また、日本では政治的なボランティア活動の存在価値が主権者教育・投票啓発運動などに縛られているが、ドイツでは討論を活発に行っている。所属している大学の投票啓発サークルで、オンラインでの選挙活動についての知識についての発信などを始めていきたいと思う。

また、上記以外にもボランティアに対しての積極性など様々なことから感銘を受けたのでボランティア活動だけを問わず日々の生活の中に事業で学んだことの破片を散りばめていきたいと思う。

(2)

■このプログラムを通して学習したこと

私はこの交流を通じて、特に2つ大きな学びがあった。1つ目は、日本の同世代でも多様なボランティアに目を向け、活動している仲間が多くいることだ。各メンバーの所属するボランティアを知ることができ、多種多様なボランティアがあることに気づき、新鮮だった。事前研修や、交流を深めていく中で、日本団同士でのボランティアについての知識も共有し、深め合うことができたことが印象的である。今まで自分が関心の少なかったボランティア活動についても学ぶ機会となり、より興味が湧いたと実感する。2つ目は、日独ボランティア活動には違いが多くあるということだ。日本は無償性に重きを置いているが、ドイツにはボランティア活動への恩恵のようなものがあると学んだ。

また、ドイツの青少年社会参画支援では、どの団体でも話し合うことを大切にしている印象を受けた。今後活動していく際に大切なことは、話し合い解決していくことだと実感した。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

今回の交流を通じて、自分自身の知識の浅さを痛感した。ドイツ側のメンバーは、日本側の質問に素早く答え、所属しているボランティアの内容も誇りを持って話していたように感じる。これまでの私は、海外に興味があり、あまり日本の現状について知ろうとせず、自然と入ってくるニュースだけに耳を傾けていた。海外の文化や生活を知りたいければ、まず日本の問題に目を傾けることが重要であり、自国を知った上で他国と比較していくことが必要だと考える。自信を持って主張、意見を言えるよう、知識を増やしていきたい。加えて、これまでには環境問題、動物愛護、女性のための活動などに興味を持ち、調べていたが、今後は青少年への支援も考えていきたいと思う。今回の交流では、青少年への支援の重要性を深く理解できた。学べたことを活かし、コロナ禍でも自分にできる活動に積極的に参加し、新しい経験を増やしたい。

(3)

■このプログラムを通して学習したこと

まず、若者の社会参画と聞いて私が思い浮かべていたものは、政治参加や地域清掃などでしたが、日本団の皆さんが行っている多様なボランティア活動や、ドイツで行われている社会的弱者にあたる親子の支援をするもの、自殺予防をするボランティアなど、もっと身近な人と関わりあう参画の方法があることを知りました。

特に印象に残ったのは、「peer to peer」の考え方です。私の中で、若者というのは大人と共に行動をするか、大人に指示されながら行動するものだと考えていましたが、[U25]では自殺を考えている若者に対し、同じ世代のピアカウンセラーが話を聞くというものでした。同世代だからこそできる支援、ボランティアの形というのを実際の活動と共に知ることができました。

また、「失敗」に対するドイツの皆さんの考え方がとても前向きで、諦めずに挑戦し続けてみようと思えました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

今回「peer to peer」の考えを学びましたが、身近なところにあまりそういった考えのもと活動している団体がないと感じたので、大学の友人にも対話していきながら理解を増やし、そのような団体を作りたいと思っています。コロナの影響によって人と直接つながる機会も減った今こそ、若者が自分と社会のつながりを再認識し、これからの社会を作る世代として行動を起こしていくことが必要になると感じました。

Wencke さんも仰っていましたが、それがどんな内容だとしても、ボランティアの存在があることによって社会が成り立っていると、今回強く感じたため、コロナ禍の中でも自分ができる参画の形を見つけていこうと思いました。

(4)

■このプログラムを通して学習したこと

私は、社会参画と聞くと、政治への参加や、社会への貢献活動を思い浮かべましたが、プログラムの中で、家族内で休みの日のプランを考えることも社会参画の一つだということを学びました。最初から大きなことへチャレンジすることは抵抗感があり、最初的一步を踏みだしにくいですが、このような日常的で簡単なことからなら誰でも参画することができると感じました。これからの活動の中で参加を促す場面があったら、参加に対して難しく考えさせないよう、内容を吟味していきたいです。

また、ドイツ団の方からだけでなく日本団の参加者からもたくさんの刺激を受けました。参加者の中には、私の知らない活動を行っていたり、県内や国内にとどまらず、海外にも目を向けて活動を行っている方もいらっしゃったりしました。私は、今の活動により力を入れていくのはもちろん、他に自分ができることを探し、たくさんの活動を行っていきたいです。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私は、このプログラムで学んだことを、私の所属団体に共有し、団体全体としてより良い活動を行っていきたいと考えます。私は、現在4つの団体に所属して様々な活動を行っていますが、そのどれもが有意義な活動をしているとは言えません。そこで、今回のプログラムで学んだ若者の社会参画やその促し方を、所属団体に共有し、これからどのような方法や活動を行ったらより効果的になるのかを話し合いたいです。

また、所属団体以外でも、友人や先輩などにも共有を行っていきたいです。私の周りには、サークルやボランティア団体などに所属していない人もいます。ですので、そのような人に今回学んだことを共有し、少しでも社会参画に興味を持ち、実際に行動に移すことで、社会参画に関わる人が増えてほしいです。

(5)

■このプログラムを通して学習したこと

このプログラムに参加するまで私は、「若者の社会参画」というものをボランティアに参加することや選挙に参加することとして捉えていました。しかしこの事業を通して外的行動だけが社会参画ではないと気付きました。政治について学ぶ、社会問題に関心を持つ、その問題の解決の糸口を探す、このような内的行動も社会参画の1つに入ることを学びました。社会参画というと難しく大きなことのように捉えがちですが、意外と自分が思っているよりも身近なものであると感じました。だからこそ、まずは「社会参画とは何だろう。」と考えてみるのが大事だと思いました。そして被支援者や当事者の意見にしっかりと耳を傾けることも重要だと感じました。ドイツの学生とのディスカッションを通して、社会参画の課題がたくさん出てきました。その一方コロナ禍で自由な時間が増えたことにより、ボランティアの新しい参加者が増えたなどの利点も見つけることができました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

これからは、もともとある団体に所属して活動を広げていくだけでなく、自ら立ち上がって団体を設立するなどの自分を発信源にした活動も行っていきたいです。今まで関わったことのない活動にも挑戦していきたいと思います。この事業後も日本の学生、ドイツの学生とSNSを通じて連絡を取り合いたいと思います。お互いの活動の近況報告であったり、何か困ったり悩んでいることがあれば相談をして助け合いたいと思います。そして活動の幅を広げるのはもちろんのこと、社会に関する知識や教養もさらに身に付け、より意味のある活動にしていきたいです。最近では、この事業に参加したことでドイツにさらに興味を持つようになり、ドイツ語の勉強も始めました。ボランティア活動だけでなくドイツ語の勉強も頑張り続けたいと思います。そして来年もこの事業に応募し、現地に訪問できることを願って、今自分ができていることを日々積み重ね、様々なことに挑戦していきたいと思います。

(6)

■このプログラムを通して学習したこと

社会参画において成功するための条件について、失敗は許されるとあったが日本では、失敗は悪いことというイメージがあるように思う。そうではなく失敗から学びを得て成功につながることもあるので失敗はすべて悪いことではなくそこからどのようにしたら成功につながるのかが大切だと学んだ。自分自身や周りの失敗を受け入れて前向きにできるようになったらもっと楽しく活動ができるのではないかと強く感じた。

この成功する条件を含め、講義やディスカッションを通して、ドイツでは若者自身がしっかりと参画をし、成功するための条件が満たされた環境にあるように感じた。そして日本では若者の社会参画についてあまり目を向けられていないことに、気付いた。若者の活動がもっと支援され、失敗が許されたり、決定権が若者にある、そんな環境を日本でも意識的に作っていく必要があると感じた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

どれほど参画ができてきているかの段階についての話があったが、今所属している団体や学校での活動を思い返してみると「見せかけの参画」になってしまっていることが多いと感じた。意見を出して採用されてプロジェクトや活動に参加できることが大切だと強く思った。そして、今ボランティア活動で子ども達と関わる時や所属団体での活動の際には、私が積極的にそういう環境を作っていきたいと思う。ドイツの方々が出していた、自分たちのことは自分たちで決める、失敗が許される、そのような環境作りから始めていかないとボランティア活動も活発化していかないとと思うので、この学びをたくさんの人に広めて、仲間を増やしていきたい。

(7)

■このプログラムを通して学習したこと

・社会参画の意味をきちんと認識できたこと。聞いたことはあってもそれが何か人には説明できなかった。プログラムを通して参画は身近で既に自分がやってきたことだと気が付けました。

・ドイツの余暇活動、ボランティア活動がまず盛んであることを知り驚きました。その背景に社会法典第八編が存在しており国として若者が社会参画を行うことを支援していることも知りました。同時にまだまだ若者の社会参画への大人の関与の仕方や若者のモチベーションについてまだまだ課題があるという現実も学ぶことができました。

・一緒に参加した日本団の学生の方々の自分のボランティアに誇りを持っている姿勢から、私も自分に自信が持てました。皆さんがたくさん質問を投げかける姿から、些細な事でも質問コメントしてみようと思えて、積極的になれました。先日、大学の授業が始まり、授業の中でもためらわず質問コメントができるようになりました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

プログラムで学んだ“見せかけの参画”を私自身ボランティア活動でやっていました。自分が指揮を執るとき皆についてきてほしいが為に仲間の意見を聞いても取り入れない姿勢でいました。プログラムを通し、私がやってきたことは参画に反し、仲間のモチベーションを削ぐ行為だと気が付きました。

今後は、“皆の意見にとっても意味がある事”や“仲間の皆がとても大切な存在”である事を皆に伝えていきたいです。さらに、プログラム中のどんな質問コメントも受け入れてくださったあの雰囲気のように、私も自分のボランティア団体で話し合いをしていきたいと思いました。

(8)

■このプログラムを通して学習したこと

今回のプログラムに参加し、若者の社会参画とは、社会に対して関心を持ち、自ら考えて行動すること。そして、社会参画のしやすい環境は”私たち自身が作り出すことができる”ということを感じた。更に今回のオンライン交流に参加する中で、ドイツは自国の社会問題に対して一人一人が主体的に考えているという印象を受けた。社会参画がとても身近な存在であり、勇気をもって踏み出すことで簡単にスタートすることができるシステムや多様な面での団体活動を行っている。背景として、「難民」に対するこれまでの歴史が深く関わっているのではないかと思う。

ドイツでは、政治の中でも難民政策を掲げ、若者からお年寄りまで難民に対する自分の意見を持っている。ドイツに比べて日本では難民問題に対する意識や考えを持っている人は数少ないと考える。今まで以上に世界の情勢に目を向け、一人一人が難民問題への高い意識を持つことが重要であると感じた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

今回参加したドイツ、日本団員の皆がそれぞれの場所で様々な活動を切磋琢磨に行っており、普段関わることのない方々との交流や意見交換をすることができた。貴重な経験を活かし、彼らのしている活動で取り入れている素敵な部分を積極的に今後の活動でも参考にして取り組んでいきたいと考える。また何かにチャレンジしたい、何かに夢中になりたいと思ったとき、迷わず一歩踏み出してみたいと思う人が交流の輪に参加しやすい環境づくりや国際交流の場で人と人をつなぐ架け橋になりたいと思う。そして、自分の思いや考えをしっかりと持ち伝えられる機会を提供することで、刺激し合い、数多くの若者のと一緒に社会参画へのきっかけとなる活動を今後積極的に行っていきたい。

(9)

■このプログラムを通して学習したこと

様々な講義を受ける中で、参画は日常生活のあらゆる場面に存在し、身近なものであることを実感することが出来た。また、自分の身の回りには見せかけの参画が多いような実感もあった。誰もが意見を言い合って形にしていくことが大切であり、その過程が社会をつくっていくうえで欠かせないものであり、参画に繋がっていくことが分かった。参画にとって失敗できる場があることの大切さも実感することが出来た。私がボランティアを始める際に、ある職員の方から、「ここは失敗が出来る場所だから、いろんなことに挑戦して学ぶと良いよ」と言われたことを思い出した。自分が参画できる貴重な場所、機会が身近にあったことを改めて実感することが出来た。バーチャル訪問やディスカッションでは、日本と比較してもドイツはボランティアに積極的であることを感じた。もっと自分自身が自分の国について関心や問題意識を持つことを大切にしなければならないと思った。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私の団体は、これまで活動の補助やキャンプの企画・運営を行うことが活動の主であった。ボランティアが企画し、子どもを募集して運営することを行っていたが、今回の事業を通して子どもが自分たちで一から作るキャンプを一つの企画として提案したいと考えている。子どもが自分たちで意見を出し合って形にしたキャンプに参加することは貴重な社会参画の機会となるのではないかと考える。また、ボランティアの仲間に今回の学びを共有することでこれまで行ってきた活動の幅をさらに広げていきたいと考える。具体的に言えば、小学生対象のキャンプが多かったため、中高生を対象としたキャンプの提案も行いたい。これは、ボランティア活動を行っている自分たちの姿を見てもらうこともできるため、新たなボランティアスタッフの獲得にもつながりたいと考える。

(10)

■このプログラムを通して学習したこと

私はこのプログラムを通して、「参画」の解釈が変わりました。私は「参画」については、20歳くらいにならないと実際にできないものだととらえていました。しかし、ドイツの青少年連合のお話を聞いて、参画は幼児のころからできることがあるということを知りました。ドイツは日本よりも問題意識が高く、公的機関からの支援が日本より充実しています。法律でも青少年が守られていることに日本との大きな違いを感じました。

また、私はこのプログラムを通して「ボランティア」が抱える悩みに国境はないと学びました。なぜなら、日本とドイツでは支援の量や質が大いに異なるのに、当事者が抱える悩みや苦労は違いが少なかったからです。予想よりも共感できる部分が多くてなぜか安心しました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私はボランティアは社会参画のための一つの手段だととらえます。なぜなら、社会のために自分たちで考えて企画や活動を実行するからです。私はボランティアで指導する立場になるときがあります。その時には、失敗を受け容れる空気を作ることを意識したいです。社会参画には、自主性が求められています。自主性をもって進めるには、議論が行き詰まったときに適切なサポートが提案できるようにする必要があります。適切なサポートができるように考えていきます。

今後ボランティアをしようとしている子どもたちや後輩がいたら、他人のためだけではなく、自分の生きたい人生ややりたい学びを見つけるきっかけになることを伝えていきたいです。関連して、自分が所属しているボランティア団体に社会参画の視点から価値をつけていきます。少しでも多くの青少年に社会について関心を持てるようにするためです。

(11)

■このプログラムを通して学習したこと

私は今回のプログラムを通して、社会参画に対するイメージが大きく変化しました。日本では社会参画というとボランティアなどの表立った活動を思い浮かべがちです。しかし今回、青少年の参画は旅行の計画など家庭内の小さな事案から生じることを知りました。日本では社会参画を難しく捉えすぎているように感じます。

またドイツとの違いの一つとして、日本の青少年の活動が学校などの小さな範囲にとどまっていることが挙げられます。視野を広げて様々なことに挑戦する姿勢が大切だと感じました。

私たちに今後必要な社会参画のあり方は、見せかけの参画にとどまらず、影響力や決定権をもった参画です。どれほど良い意見・改革案を持っていても、個人ができる範囲には限りがあります。また参画者は楽しむことが不可欠です。したがって理想の参画社会を実現するためには、個人の積極性の他に、国・地域・自治体の補助、多様な参画の領域が必要であると感じました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私はこのプログラムを通して、自分の興味関心の幅が広がりました。また語学学習のモチベーションが高まりました。私はより多くの人にこのような体験をしてほしいと感じています。

今回のプログラムを知ったきっかけは、自分の所属する研究室の先生の案内でした。先生からの情報がなければ、私は成長の機会を一つ失っていました。私は興味と時間とチャンスがあれば、できることの幅が大きく広がると思います。そしてこのプログラムを通して、興味は社会参画にとって、継続性や効率性といった面で大きな影響を与えていると感じました。そのため今後の取り組みとして、自分の経験談を話すことで興味をもってくれる人を増やすことを考えています。

また「子どもに指導するのではなく一緒に体験する」というマライケの話の中で出た言葉が印象に残っています。今後の研究活動やフィールドワークにおいて、子ども・若者の社会参画を意識しながら取り組みたいと思います。

(12)

■このプログラムを通して学習したこと

日本で「若者の社会参画」と聞くと大学生や高校生のみ組織が政治的あるいはボランティア要素の強い活動を行っていると思えがちだ。しかしドイツの場合、青少年のみならず大人も「若者の社会参画」に積極的に携わっているということを経験を通じて実感した。

実際に社会参画を実現するのは青少年であることに違いないが、その環境づくりに大人も携わることでより市民が一体化して社会参画を行えるのではないかと考えた。日本の場合、たとえ社会参画への意識が高い青少年がいたとしてもそれを受け入れる社会ができていないように感じる。「余計なことに首を突っ込むな」、「子供は勉強だけしていればいい」、直接的に言わなくてもこう思っている大人がドイツに比べて日本は多いのではないだろうか。

私が大人になってからも今回の交流事業で学んだことや今の気持ちを忘れずに、年齢を問わず皆が積極的に社会参画できるような環境を整えたいと強く思っている。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私の将来の夢は官僚になることだ。官僚になるためにはあらゆる知識や教養、視点を身につけなければならない。私は大学4年間を「下積みの時期」と位置付けた。学部の勉強はもちろん、留学を見据えた海外交流や学内外の勉強会への参加をとおして自分自身を磨いていこうと考えている。今回の日独青年オンライン交流はその第一歩となった。若者の社会参画に関わっている5つの団体のメンバーや同世代のドイツ人青年からドイツの話や、日独共通の課題について語り合ったことはとても印象に残る体験であり有意義な時間を過ごすことができた。

日本とドイツを含む先進国において、少子化は深刻な問題だ。一方で少子化だからこそ私たち若者の意見がより貴重なものとなるのではないかと考える。「下積み」の4年間で新しい知識や価値観を自分の中に蓄えるとともに、積極的に発言をして社会参画に取り組みたい。

(13)

■このプログラムを通して学習したこと

ドイツでは、日本と異なりボランティア活動が青少年教育の一環として扱われている。そして、様々な活動を通じて「どのような社会になっているのか。どのような課題があるのか。」について学ぶことができる環境や制度が整っており、社会を構成している一因であることを認識する仕組みになっていた。

日本では、政治や自殺等の分野について家族をはじめ他人と話すことはタブーとされているが、ドイツではこれらの分野に若者自らが様々な考えや意見を持って活動しており、その活動から「学生だからできないこと」はないと感じた。また、ドイツでは、「失敗から学ぶこと」を十分に認識した上で活動が行われている。日本でも、このことは認識されているが、年齢を重ねていくごとに失敗を避けてしまいがちである。

両国ともに多くの社会課題を抱えているが、日本にも NDC や U25 のような活動があれば社会参画について、さらに関心を持つ一助になるのではないかと感じた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

日本とドイツが抱えている課題は、両国ともに相違があるため、ドイツの解決方法をそのまま用いることは難しいが、意識的な部分に関して活かすべき点があると感じた。

ドイツでは、様々な分野の課題に対して若者自らが様々な考えや意見を持って活動していた。課題解決を進めていく中には、難しい条件等も多く、白熱した議論や解決に結びつかないこともあるが、このプログラムを通して、結果はもちろん、その過程も重要であると感じた。そのため、失敗を恐れ、何も行動しないのではなく、まずはできることから 1 つずつ行動・実践していきたい。特に、進めていく上では活動の目的を明確化し、団体で活動する場合は、参加者全員が主体的に活動できる環境づくりが大切だと感じた。

今後は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から活動等は制限的になるが、社会を構成している 1 人として責任を持ち、社会の一助となれるよう模索していきたい。

(14)

■このプログラムを通して学習したこと

青少年の社会参画について直接話し合うことは、文献よりもはるかに大きな学びをもたらした。家庭・学校における行動も参画と定義していることは大きな発見だ。自分の部屋の模様替えや旅行の行き先を決めることも参画に含まれるとは知らなかった。社会だけでなく、家庭や学校での参画を保障するには異なる視点からのアプローチが必要だ。また、私が青少年の社会参画の最善例だと考えていた「青少年議会」がザクセンの方々にとって最善策ではないということにも驚いた。州議会議員が関わるなど公的な要素が高まるほど、青少年の参画が協働レベルに達することが難しいからではと考えた。加えて「制度上の参画」と表現されていて、毎年同形式で開催と決められると、青少年の自主的な参加の保障が難しいのではないかと考えた。毎年開催が決められていることが素晴らしいと感じていたが、強制力が高まることは参画にとって難点であると学んだ。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

ザクセン州青少年連合という行政から資金援助を受ける非営利団体が、青少年の社会参画推進の仕事を請けているということに非常に感銘を受けた。私にとって理想の職業形態であると感じたので、まず大学で日本の青少年の社会参画の重要性を高める研究を行いたいと考えている。また教師を目指しているので、教育現場においても参画の精神を忘れず、生徒の自主性を伸ばす一助ができたと思う。現在所属している NPO 団体では、今回学んだ参画の精神を団員に共有し、活動を話し合っで発展させていくことを心がけていきたい。加えて、今回のプログラムに参加してことでドイツに行きたくて学びたいという思いがより強くなった。今回得ることができたドイツの皆さんとのお縁を大切にして、留学に向けてドイツ語の勉強等より努力する予定だ。

(15)

■このプログラムを通して学習したこと

今回の日独学生青年リーダーオンライン交流事業に参加して、社会参画について1つの理解と1つの新たな知見が得られた。私は社会参画という概念と聞くと選挙が青少年主体の社会問題に対する何らかの活動団体と短絡的に考えがちだったが、実は参画には多様性があり家庭や学校というような小規模で身近な場でもなされていることを知り誤解が解けた。更に個人的には、若者による選挙に代表される社会参画活動がおざなりにされていることを鑑みて、選挙など社会参画活動を行わない人に罰金を課す等の所謂強制的な参加を求めるべきで、それによってこそ意見の多様性が担保されると考えていた。しかし若者が積極的に社会参画をしない場合、必然的にそこには構造的問題が存在し、失敗を受容する土壌、支援者たる我々が若者たちに何を希求しているかを聞き理解すること、自分たちが意見を述べても計画は変わらず、若者にとって協働決定ができない現実等があるということを学んだ。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私はこのプログラムを通して、計画が既に固まっているにもかかわらず青少年の意見が聞かれるが、それによってプロセスが左右されることはないという、現所属団体での見せかけの参画を出来るだけ排除していこうと考えた。そして更に重要なこととして、若者が参画しやすい環境整備が必要であると痛感した。失敗を許すことは恥の文化であるといわれる日本では難しいかもしれないが、これからの社会を担う若者に青少年交流センターという守られた社会での活動機会を提供することで、失敗に寛容な社会の構築の一助になればと心から願う。今回の交流は自身の日頃の活動を自省するいい機会にもなった。一度ではなく何度も参画の機会を与えることは業務の効率化の観点から欠落してしまっていた部分だった。今回得られた高いモチベーションを所属団体のほかの構成員にも伝えていきたい。

(16)

■このプログラムを通して学習したこと

私は、社会参画として、団体に所属しながらボランティア活動を行ってきました。しかし、実際にドイツの方々とディスカッションを通して交流することで、ドイツでは日本よりも社会参画に対する若者の積極性をうかがうことができました。社会参画というのは、見せかけだけでなく、実際に社会に変化をもたらすことに繋がるような活動をするべきだと私は考えます。ですので、積極性の大切さをもう一度再確認し、所属している団体での活動にももっと積極的に参加したいと思いました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

今回のプログラムを参加して、ドイツには政治に関わる若者の参画する場所が日本よりも豊富にあり、実際にドイツの若者と交流してみて、政治に関する活動を十分に行ってこなかったと気付かされました。日本では、政治に関する自分の意見を簡単に言えない雰囲気があることが原因だと思います。しかし、よりよい日本を作り上げていくには、若者の声は必要不可欠だと考えます。ドイツのように、周りを気にせず、政治に関するボランティア活動も積極的に行っていき、結果として日本で若者が政治に関する活動をもっと積極的に行えるように貢献したいと思いました。加えて、ドイツは移民難民をたくさん受け入れていることもあり、移民難民の方々が社会に溶け込めるような取り組みが多くなされている事を知りました。日本は、難民受け入れに対して、システムが十分に整っていない部分があるので、難民の方々をサポートするボランティア活動を行っていきたくと思いました。

(17)

■このプログラムを通して学習したこと

プログラム参加当初、「社会参画」と聞くと正直馴染みがあまりなく、参加することに対しての敷居が高いものという印象を抱いていた。しかしドイツ青少年連合の講義を通して、身近なものという認識に変化した。日本においてボランティアは異質なものであると捉えられることがあるが、ドイツでは国をあげて社会参画に繋げる政策が整っており、様々な文化背景を兼ね備えた人々の共存する国ならではと思った。

ディスカッションで各々のボランティアやその問題点を話し合う中で、共通点や相違点を見つけることができた。活動している地域や活動内容が異なっているにもかかわらず、それぞれが積極的にボランティアに関わり、社会や今後の後輩育成に貢献したいといった点において共通していた。今回のようなディスカッションも今後の社会を良くしたいという共通認識が持っており、社会参画の一步に繋がっているといいと思う。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

今後の日本を担っていく存在である私たちにとって「社会参画」は重要なテーマであるが、実際若者の声は届かないことの方が大きい。しかし若者の世論が届かない理由を考えることができたため、今後社会参画に関与していく中で、今の課題に向けてどのようにアプローチをしていくか、考える機会を増やすことが社会参画の一步に繋がると考えた。

まずは所属団体のメンバーのモチベーションの差といった課題点に立ち向かいたい。事業を通して共通した課題を抱えている団員と話し合う機会があり、どのようにアプローチすればいいかの意見交換を行うことができた。しかしやる気のあるメンバーのみとなると限定すると参加に対する敷居が高くなることもある。そのため、やる気の高さに合わせてそれぞれの強みを発揮できるような場を作っていきたい。今後もボランティアに積極的にコミットし、社会参画をしていきたい。

(18)

■このプログラムを通して学習したこと

私は今回のプログラムで、日本とドイツでの社会参画には大きな差があるということが明確にわかった。ドイツではキャンプなどの余暇活動が盛んに行われ、それが社会参画の第一歩に繋がり、協調性であったり失敗から成功の道を学ぶなど“社会”で生きていく上で必要な学びとしてその活動そのものが重視されており、これは日本ではまず見ないシステムだと思った。しかし、私はこの余暇活動に重点を置くというのは日本には浸透しづらいように感じた。日本では外での課外活動よりも学校内の活動を重視しており、“子供に対する接し方”というのは年々デリケートになっている。そんな中、子供を無資格の団体に預けるのは、かなり問題があると思う。しかし、ドイツをモデルケースとして少しずつ日本に浸透させることは可能だと考える。そうすることにより、日本の若者の低すぎる政治への興味関心を向上させることはできるだろう。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私は今後、大学の留学生や友人に共有していきたいと思っている。留学生には、自国の余暇活動の過ごし方や若者の社会参画について、自身の活動経験など様々なことを聞いて、今回のプログラムで学んだ、ドイツと同じ所や違うところなどを探してみたいと思う。また日本人の学生には、余暇活動に対する考えや日本ではどのようにしたらいいかなどのお話をしてみたいと思った。政治に対することなども聞きたいと考えている。

(19)

■このプログラムを通して学習したこと

コロナ禍でもネットを活用して交流できると他の活動を聞いて思いました。日本もドイツも似たようなことで悩んでいるなど、コロナの話題からも、自殺予防の話題からも感じました。自殺予防においては、若い人が相談に乗っているという点が興味深いと思いました。社会参画において私自身共感したのは、学生と社会人が協力して参画に取り組むというところです。しかし、社会人と学生はできることが違うと知り、自分たちの中でも社会人に近づけるようにコミュニティ内で高め合っていきたいと考えました。コロナ禍で活動ができないので、私は本を読むことで自分のできること、考えられることを高めます。ドイツの人たちは日本と比べて、友達よりも家族と一緒に休暇を過ごすことを大切にしていると知りました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私は大学でパソコン部に所属しています。コロナ禍で活動が制限される中、部活動で何か活動を行いたいと考えています。部活内のディスカッションに活用していきたいと思いました。

話し合うことの重要さを感じました。また、諫早青少年自然の家で子どもたちと仲良くなるために子どもに寄り添うことをしたいです。子どもと心で通わせることが大事だとドイツの方の意見を聞いて思いました。他にも、私たちはあまり政治に積極的ではないので、大人になってあまり苦労しないためにもニュースなどをみておこうと思いました。友達に交流したことを共有してドイツってこんなところなんだと教えることによって良さを広めていきたいです。中でも驚いたのは教育が市町村によって違うところです。

(20)

■このプログラムを通して学習したこと

「若者の社会参画」はとても些細なことから始まることだと学びました。しかし、「若者の社会参画」はドイツ（ヨーロッパ）と日本とは大きく違いました。ドイツは社会参画の制度が日本よりも充実していてボランティアや政治などに関心を持つ人が多いと感じました。私は、若者の社会参画の中で「実現するのに時間がかかるため、若者が自分たちが参画した意味がないと感じやすい」ということにとっても共感しました。また、「自分が参画している際に目に見える結果が欲しい」と願っても現在のドイツでは実現はまだ難しいと学びました。これはドイツだけではなく日本の同じなのではないかと思いました。しかし、ドイツは子ども・若者の参画を後押しする大人が日本よりも多いため、日本より早く若者の社会参画が行いやすい環境になるのではないかと思いました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

ドイツでは子ども・若者の参画を後押しする大人が多く、お互いにネットワークを充実させるために努力していたり、大人と子どもとで話す機会が少ないため若者をユースクラブから集め、交流の場を提供したりしていることを学びました。この活動は日本、少なくとも私の周りでは行われていないと思います。例えば、日本では18歳で選挙権が与えられます。なので、学校では授業で選挙権を持ったら投票に行こうと言われていたり、周りの大人から若者の投票率が低い、若者は選挙に行こうと言われていたりしていますが、それは口だけで行動ではあまり現れていないと思います。そこで、日本でも実際に若者と大人と話す場を提供すべきではないかと思いました。参加者の Matt（橋本みなみさん）から所属団体で子供たちが横浜市長に手紙を出し、実際に市長とお話したと聞きました。なので、私も大学のボランティア支援室にこの提案をしたり、団体に入ったりすることによってこの提案を広めたいと思いました。

(21)

■このプログラムを通して学習したこと

私は大学で国内経済学を専攻し、特に日本の人口減少問題について学んでおります。この問題の解決策として私は日本が移民と難民を受け入れる事だと考えました。実際に日本が移民や難民を受け入れた際に「自国民と移民や難民との社会保障や待遇の差の線引き」について議論になると考えました。実際に移民と難民を受け入れているドイツの方たちにこの議論の答えを聞くために令和 3 年度日独学生青年リーダー交流事業に参加しました。ドイツ側の参加者から「私は日本を訪れた際にタトゥーが理由で銭湯を利用する事が出来ませんでした。それにより日本は少数派に対して冷たい国だと感じました。恐らく移民と難民をネガティブに捉える人が多く、日本が移民と難民を受け入れるべきではないと考えます。」と意見をいただきました。一方でドイツは少数派に対して柔軟であるため、パスポートを持たない難民が PCR 検査を受けられるように法律を変えました。この事から日本が受け入れる事は厳しいと考えました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私はこのプログラムを経験して記者になりたいと考えました。上記で書いたドイツ側の貴重な意見を多くの人に伝えたいと考えましたが、それを実行する手段がありませんでした。この意見を知ったとしてもどうするのか。誰に伝えるのか。自分の心の中でモヤモヤしているだけでなく人に伝える事が使命だと感じたからです。他にもボランティア活動に精を出している同世代の方々が日本だけでなくドイツにもたくさんおり、その存在を伝え共感する人を増やしたいと考えました。

(22)

■このプログラムを通して学習したこと

サービスのターゲットとなる層が多様であることがうかがえた。この点は日本とドイツの大きな違いであると感じた。

それでは日本で教育系以外のボランティアは存在しないのかと疑問に思い調べてみると、農林水産業系、村おこし系など教育系以外のボランティアも存在していることが分かった。こうした状況からボランティア募集の情報を学生に届けられていない、又は情報は届いているが学生が魅力を感じていないという可能性がある。これも若者の社会参画が進まない一つの要因であると思う。

こうした状況を解決するためには、ボランティアを募集する側とボランティアをしたい人の適切なマッチングをすることができる仕組み作りが必要である。一方で、ボランティアを募集する側の競争を加速させてしまい、より観光的な内容の活動ばかりに人が集まってしまうことや、今までよりやる気の低い人がボランティアに参加しやすくなってしまいうという課題もある。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

確かに学んだことはあるが、正直、このプログラムを通して学習したことを活かす機会というものが現段階であまりイメージできていない。

海外の人と通訳なしで会話ができるようになりたいと強く思ったので、英会話を学びたい。

(23)

■このプログラムを通して学習したこと

プログラムを通して、自分自身が考える「社会参画」の活動の幅が広がった。これまでは主に政治参画をイメージしており、子どもとは程遠いものだと感じていたが、家庭や学校での生活も社会参画であるという気付きを得た。家族で旅行の計画を立てることなども含まれており、非常に身近で、誰もが参画できるものだと感じた。また、2年前の参加時と比較してボランティアの捉え方にも変化が表れていた。2年前は「ボランティア活動は当たり前のこと」と考えているドイツ団は多かったが、今年度は、当たり前と考えている人はグループ内のドイツ団1人のみであった。コロナウイルスの影響も関係していると考え、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなってきたと感じた。

ピアアプローチの活動が印象に残っており、若者が若者に働きかけることで、同じ目線で物事を考え、信頼関係をベースにした取り組みが可能になると気づくことができた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

私が社会参画の見方が変化したように、どこか他人事に捉えている人、堅く難しいものと感じている人に、社会参画は身近で誰もが参画できるものだと気付き、関心を持ってほしいと感じた。ピアアプローチの活動の重要性を再認識することができたので、学生ボランティアコーディネーターという立場からボランティアを切り口として、社会参画に関心を持ってもらえるような活動を行っていきたいと考えている。所属団体のメンバーに本事業の活動内容や学んだことを共有し、メンバー1人1人が主体性をもって参画できる方法を取り入れたいと考えている。本事業を通して、両国の価値観や文化、課題などにおいて相違点と共通点を知り、課題解決を考えるヒントを得ることができた。他国のみならず自国にも目を向けていくことで国際的な視点を持ち、自分事として捉えられるようにアプローチ方法を考えていきたい。

(24)

■このプログラムを通して学習したこと

オンライン講義を通して、前回よりも深く若者の社会参画について理解できた。現在の日本の若者は学外における活動が少ない傾向がある。学校での勉強や部活で精一杯なことや、恵まれていて生活に不自由してないことなどが、社会参加意識の低さにつながっている。しかし、若者の社会参画は若者自身にメリットがあることだ。社会参画を通じて、若者自身の能力が向上でき、若者に対する政策の向上が期待できる。若者の社会参画は大人が協力することによってしやすくなる。権限を渡して、失敗が許される雰囲気を作り出さなければならない。私が大人になったら、青少年を信頼して参画できる機会をできるだけつくりたい。また、今回社会参画しているメンバーの話聞き、改めて社会参画の楽しさを知ることができたので、周りのそうした機会に積極的に飛び込もうと思った。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか。

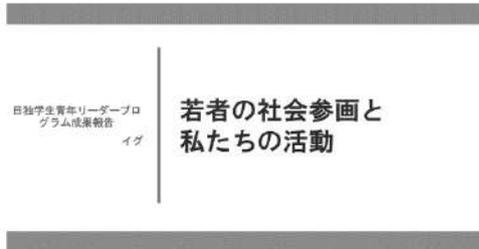
自分自身の生活が苦しくなると、なかなか社会参画について考えられなくなるが、少しでも余裕があれば積極的にそうした機会に飛び込んでいきたい。これは希望でしかないが、地域の人々のための深夜も使える学習室（コワーキングスペース）をつくりたいと考えている。私が住む地域には夜に家の外で作業できる場所はないといってもよい。しかし私を含めて、家だとなかなか勉強や作業が進まないという方もいるだろう。そういった人たちにニーズがあると考えた。そのスペースをサードプレイスにもしたいと考えている。作るために、周りの尊敬できる仲間から力を貸してもらえないかと話しているが、そのスペースを使いたいと思う人みんなで作り上げていきたい。それは、参画であり、それによって、使う人にとって使いやすい場所になるからだ。

成果と課題

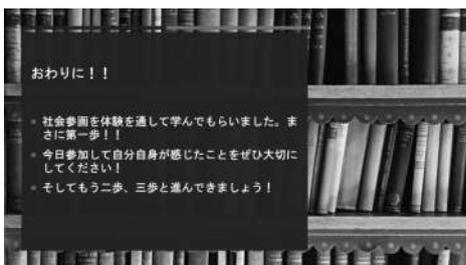
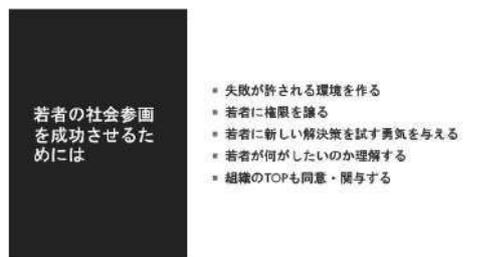
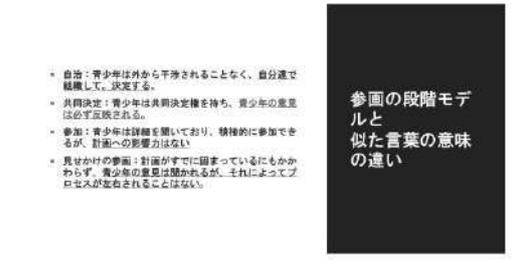
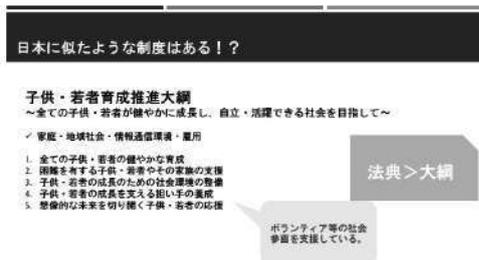
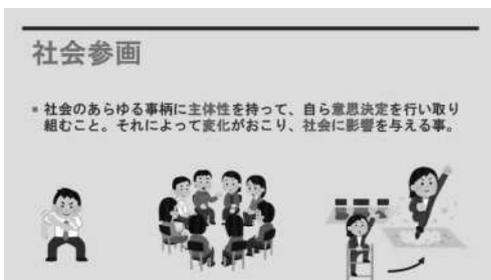
1. 日本団成果報告

日本団参加者には、本事業終了後の課題として、本事業で学んだ成果を所属団体等で発表することを求めている。以下は、報告例(抜粋)である。

※ 発表者氏名、所属等は省略。



- INPUT 若者の社会参画を理解しよう
 - 社会参画ってなんだろう？
 - 若者の社会参画の意義
- OUTPUT 社会参画と私たちの活動



2. 全体の総括（国際・企画課）

（1）企画について

本事業は例年、お互いの国に2週間程度滞在し、州政府関係機関、ボランティア団体などの訪問を通して、若者の社会参画・ボランティアをテーマに実施している。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により令和2年度は中止となり、今年度はWEB会議システムを使用したオンライン形式で開催した。

実地交流のプログラムを踏襲し「講義」「バーチャル訪問」を実施した。また、「講義」「バーチャル訪問」を通して、互いの国の制度や特色等を学んだことについて日独両国参加者がオンライン上で顔を合わせ意見交換ができる場として「ディスカッション」のプログラムを設けた。

また、講師及び訪問先については、ドイツ側の各参加者が、所属団体に活動している内容を考慮して選定した。「講義」においては、日本と欧州の社会参画制度の違いを学ぶことに主眼を置き、また、「バーチャル訪問」においては、より実地交流に近い学びを提供できるよう、団体の取組について学ぶだけでなく、実際に訪問先で活動する学生ボランティアとの意見交換の場を設けるなどの工夫をした。

（2）成果

日本団の参加者は24名であった。従来、本事業は対面交流でも応募者は多いが、今回は2週間ほどの募集期間で定員に達したことから、コロナ禍において、オンライン形式での国際交流の機会が求められていたと思われる。

日本団の成果としては、事業全体の満足度の肯定率は100%であり、全ての参加者からプラスの評価が得られた。参加者からは、「他の参加者から多くの刺激を受け、今後も多くの経験を積み、勉強していきたい」や「実際にドイツに行ってさらに学びを深めたい」という声が聞かれた。また、事業後に参加者が実施した成果報告会では、出席者から「本事業に興味があった。ぜひ次年度実地交流に参加したい」との声もあがっている。

ドイツ側参加者からも「地球の反対側にも同じような条件のもとボランティア活動を頑張っている仲間がいることにとっても励まされた」「この交流事業に参加して、今後もボランティア活動や社会参画を続けていくモチベーションが強まった」等、肯定的な声が届いており、国際交流事業として高い成果が得られたと言える。

（3）課題

今回オンライン形式で実地交流よりも限られた時間の中での実施ということもあり、日独両国参加者から「ディスカッションの時間が短かった」という声が出ており、オンラインで実施する場合のディスカッションの持ち方は今後検討していく必要がある。また、「オンラインでもスムーズに交流できたが、実際にドイツに行って、直接経験し、交流したいと感じた」という声もあり、実地交流に対するニーズは高いと言える。

最後に、今回の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、日本団、ドイツ団ともに有意義な研修を実施することができた。プログラムに協力してくださった全ての方に感謝を申し上げる。



令和3（2021）年度 文部科学省委託事業
日独学生青年リーダー交流 事業報告書

令和4年1月発行

編集発行



独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国際・企画課

<https://www.niye.go.jp>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1

TEL 03-6407-7733

本報告書は、文部科学省の青少年国際交流推進事業委託事業として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和3年（2021）年度「日独学生青年リーダー交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。